HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	御蔵島における生態系保全を目的としたイエネコ対策の実現可能性評価に関する研究
Author(s)	野瀬, 紹未
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16668号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16668
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98278
Type	doctoral thesis
File Information	Tsugumi_Nose_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）　　氏名：野　瀬　紹　未

学位論文題名
御蔵島における生態系保全を目的としたイエネコ対策の実現可能性評価に関する研究

・本論文の観点と方法

本論文は、侵略的外来種であるイエネコ（*felis silverstris catus*、以下ネコ）による生物多様性への影響、特に島嶼生態系における深刻な被害に注目し、日本国内で主に採用されている「かごわな捕獲と譲渡方式」によるネコ対策の実現可能性（feasibility）を評価することを目的としたものである。対象地は、世界最大規模のオオミズナギドリ繁殖地を有し、近年ネコの急増により生態系への影響が顕著となっている御蔵島であり、同地で進行中の「御蔵島野生化ネコ捕獲プロジェクト」を事例として分析を行う。本研究の特徴は、外来種の先進的事例において対策を成功に導く重要なプロセスとなっており、日本の外来種対策ではようやく導入が検討され始めた実現可能性研究（feasibility study）をいち早く導入して対策の方向性を確認し、その上でネコ対策に関する生態学的側面と社会的側面の両方を統合する学際的アプローチを採用している点にある。すなわち、想定される外来種の根絶基準に御蔵島のネコの事例を丁寧に照らし合わせ、単に捕獲数の増減といった生物学的データにとどまらず、譲渡に関わる社会的受容性や運用体制の構築といった人的・制度的要素も含めて総合的に評価することで、日本国内でこの方式による外来種対策の可能性と課題を明らかにすることを目指す。方法としては、まず、金属製の箱状のわなと誘引餌を利用した生け捕り捕獲、すなわち「かごわな捕獲」の実態と有効性を評価するため、捕獲記録の整理と自動撮影カメラを用いた画像解析を通じて、捕獲効率を最大化する戦術を提案・実証する。次に、捕獲後の島内一時飼養、島外移送、譲渡について詳細な実態調査を行い、関係者への聞き取りや譲渡先へのアンケートを用いて、譲渡成功の要因を明らかにする。さらに、これらの成果を踏まえて、御蔵島における野生化ネコの個体数管理の実現可能性を検証する。最終的には、御蔵島における対策の実態から得られた知見をもとに、日本各地のネコ対策への応用可能性を検討し、効果的かつ持続的な対策のあり方を提案する。

・本論文の内容

第1章では、侵略的外来種としてのネコがもたらす生態系への影響ついて概観する。ネコは、在来生物への捕食などにより絶滅リスクを高める要因となっており、その対策には生態学にとどまらない学際的アプローチが求められる。本章ではまず、ネコ問題への対策として注目される実現可能性研究（Feasibility study）の意義を整理し、次に世界のネコ根絶成功事例を通してその理論的背景と共通要素を明らかにする。続いて、日本国内のネコ対策における課題と現状を把握し、そのなかで御蔵島の事例が持つ特徴と位置づけを検討する。御蔵島では、近年ネコの増加によりオオミズナギドリの繁殖地が脅かされ、生態系保全のために自然環境下におけるネコの排除が求められている。住民意識調査によって譲渡方式（非致死的手法）であればネコの排除が受容されることが確認される中、「御蔵島野生化ネコ捕獲プロジェクト」が開始された。本研究では、プロジェクトの重要な柱である、捕獲の効果と譲渡方式による島からの排除方法を検証し、御蔵島の事例を通して、今後の日本におけるネコ対策の可能性を探ることが目的としている。

第2章では、御蔵島におけるかごわなによるネコ捕獲の実態とその有効性を検証する。本章の目的は、捕獲活動の現状を把握し、個体数削減の効果を最大化する最適な捕獲戦術を提案・実証することである。方法としては、捕獲活動を記録すると共に、わな周辺でカメラトラップ調査を行い、捕獲成立までの行動パターンや要因を明らかにしている。結果として、冬季のなかでも1月～2月が捕獲に適していること、エサはドライフードよりもウェットフードが適していること、わなのサイズが小さいほうが適していることを明らかにした。これらの知見をもとに、現行プロジェクトの実施体制の強化や戦術の見直しが提案される。本章は、御蔵島の捕獲対策の科学的根拠を提供する役割を担っている。

第3章では、ネコ捕獲後の譲渡プロセスに注目し、「御蔵島野生化ネコ捕獲プロジェクト」における譲渡方式の実施状況と課題を明らかにする。具体的には、譲渡に必要な体制の構築状況と譲渡成功に寄与する要因を把握し、譲渡方式の実現可能性を検討することである。まず、捕獲されたネコの島内一時飼養、島外移送、島外一時飼養、そして譲渡に至るまでのオペレーションについて、詳細なデータ収集と整理を行う。さらに、譲渡率の分析に加え、実際にネコを引き取った飼い主へのアンケート調査を実施し、譲渡成功と失敗に関連する要因を探索する。結果として、島内外の収容キャパシティが最大の課題であることが明らかにした。具体的には、島内については、行政（御蔵島役場）との連携が求められ、島外については、個人の預かりボランティア宅など受入可能な連携先を増加させることが必要である。さらに最終出口であるネコの譲渡状況については、若いネコほど譲渡が進みやすい点や、個人宅からの譲渡が停滞していることを明らかにした。譲渡率向上にむけては、成ネコおよび老ネコの飼育上の利点を発信する普及啓発や、譲渡が進みにくい個人宅からの譲渡を促進させるた

めのWEB上での飼い主募集の情報発信が必要であることを明らかにした。このように、譲渡体制の強化策や譲渡率向上の方策が、御蔵島での譲渡方式の継続的な実施に向けて大きな意義を持つことを示している。

第4章では、第1章から第3章までの成果をふまえ、「御蔵島野生化ネコ捕獲プロジェクト」の実現可能性を総合的に評価している。まず、先行するネコ根絶事例との比較を通じて、御蔵島の取り組みが持つ独自性と課題を明らかにし、外来種管理に向けた条件や達成可能性について検討を進め、最後に本研究で用いられたアプローチの日本の他地域におけるネコ対策への応用可能性に言及している。